資料5

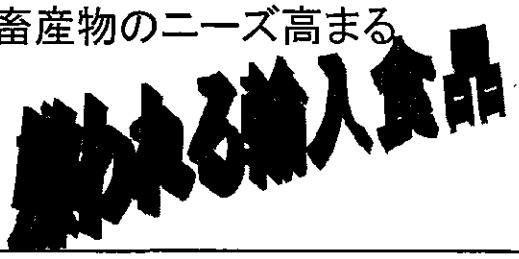
食品に関するリスクコミュニケーション（輸入食品の安全性確保に関する意見交換会）

報道の立場から見た輸入食品の安全性についての問題

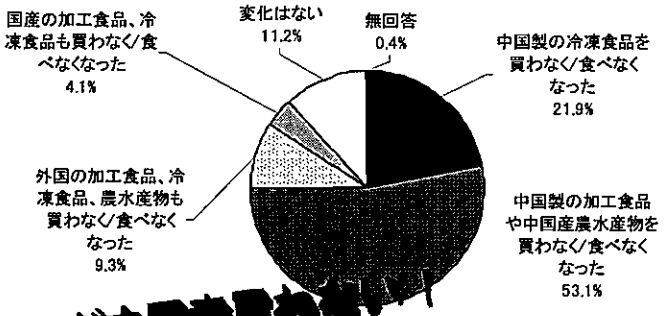
主催：厚生労働省医薬食品局食品安全部
日時：2010年1月28日（木） 13:30～16:00
会場：三田共用会議所 講堂
日経BP社 FoodScience 中野栄子
http://biotech.nikkeibp.co.jp/fsn/index.jsp

昨今の輸入食品の問題

- 2009年4月、メキシコで豚インフルエンザ発生（後に新型インフルエンザと呼称）で、外食店のメキシコ産豚肉に影響？
- 米国産牛肉、混載発覚
- 国産農畜産物のニーズ高まる



中国ギョーザ事件後、外国産の食品の購買は？



「食の安全安心ブランド調査2009」（日経BP社）の結果から

メディア報道に責任あり

- 産地偽装などに対して、「またしても、食の安全が脅かされました」という枕詞
- 「食の安全が叫ばれている中、食品スーパーは、国産の品揃えを強化しています」

基準値の○倍も残留！！

- 「輸入農産物に、基準値の何と、○倍もの農薬が残留していました」との報道
- ポジティブリスト制度開始で一律基準値0.01ppm問題が噴出
- 0.1ppmだと「何と10倍！」。しかし、ADIを当てはめると、生涯食べ続けても問題がない量
- 違反により、回収廃棄処分

産地偽装により安全が脅かされました！

- 台湾産ウナギを国産ウナギと偽装し、違法に儲けた輸入業者
- もともと、同じ海域で産卵されても、稚魚としてどの国が水揚げしたかで、生産国が決まる
- 「里帰りウナギ」問題も・・・
- 「中国・台湾産だから危ない」と報道するより、偽装で不当な利益を得た業者を追及すべき。「やり得」は許さない

中国ギョーザ事件、当初メディアでは・・・

- 「やっぱり、中国は残留農薬が危ない！」
- 相変わらずメディアをにぎわす不正確な発言やテレビの映像（中国で農薬を噴霧している様子）
- 「サリンみたいなものです」
- 「冷凍食品は検出できないから、残留農薬検査をやらなかったなんて、ひどいじゃないですか」

中国の実態見ないで不安を煽るリスク過剰報道ばかり・・・

アモイ味の素ライフ如意食品有限公司と
アモイ郊外の農場（08年6月視察）

中国産であることが原因なのか？

- 「中国産は危ない」（メディア）→「中国産は怖い」（消費者）→「中国産ではありません」（メーカー）
- 違反率は中国より、ベトナムやガーナの方が高い
- 農水省と厚労省の表示共同会議の消費者調査。80.5%が「原産地表示をすべき」と答え、理由を探ると「原材料がどこの国で作られたかで安全性がわかるから」（48.8%）、「中国等特定の国で作られた原材料を使った食品は買いたくないから」（44.8%）という原産地表示への誤解が明らかに

ほかにも食の安全に関するメディアの誤解は多い

- 食関連のメディア関係者（米国事情にも詳しいとされる人）に、「日本の食用油はGMナタネやGMダイズを原料にしているんですよ」と説明したら、「えー。だって、GM表示していないじゃない！！」
- 「天然フグの肝には毒があるので、フグ調理師免許が必要だけど、養殖フグは毒がないので免許がいらないのよね」
- 「野菜に残留する農薬の落とし方を特集記事にしたい」

なぜ、メディアは誤解する？

知らないから：

記者も科学的リテラシー低い

- 一般に、記者の知識は「浅く、広く」。記者は文系出身が多い。人事異動で別の分野の担当になれば、一から勉強のし直し
- ウラはとっても、エビデンスはとりにくい
- 科学の世界の特殊性（学会発表と論文受理の差を知らない、様々な立場の科学者の存在を知らない、など）

メディアの誤解がウソの報道に

儲かるから：

視聴率や部数が増えればメディア企業はもうかる

- 悪いニュースが良いニュース。平和な出来事はニュースにならない
- テレビは視聴率、出版は部数
- 電波も紙面も限られている（衝撃的なニュースから埋まっていく）
- リスクの大きさとニュースの大きさは比例しない

そもそも、食のリスクとは？

- 危険、危機、Risk, Danger, Hazard
- 「リスクを避ける」（日本）、「リスクを取る」（西洋）
- もともと保険用語、リスク分散投資
- リスク　＝　ハザード　×　それが起こる確率

普通の人にとっての食のリスク

「残留農薬」と「食品添加物」

- 普通の人が「がんの原因」だと思うものを尋ねた調査
- がん専門医が、「がんの原因」だと思うものは・・・・「たばこ」と「普通の食品」
- どっちが正しいのか？

誤解している食の専門家も

- 厚生労働省・リスクコミュニケーションのツールを開発する研究班。食のリスクといってもたくさんあるので、専門家に訊いてみよう・・・「今、旬の食のリスクは何ですか？」
- 保健所の食品衛生監視員が回答・・・微生物、食中毒など
- 栄養士が回答・・・残留農薬、野菜の農薬の洗い落とし方、地産地消

「ゼロリスクはない」を知っている？

- 「ゼロリスク」という言葉を知っていますか？
  知っている・・・ 123人、1.5%
  聞いたことはある・・・891人、10.8%
  知らない・・・7208人、87.2%
- 言葉の意味を説明
  802人が回答。「ゼロリスクはないことを認識することは、食の安全の議論を進める上で大切である」と正確に説明できた人30人。全く逆の意味に捉えている人も

N=8266人
「食の安全・安心ブランド調査」（日経BP社）

リスクの量の概念が理解できない

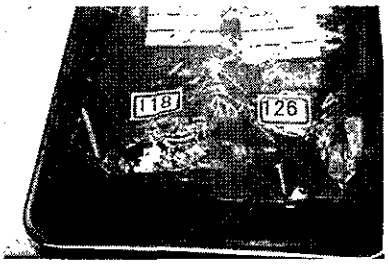
- 「どんなにわずかな量でも、毒なんですよ」----消費者団体の食品添加物バッシングの切り口
  → 量の概念を無視している
- 同じ化学物質でも量により、効果をもたらすこともあれば、害をもたらすこともある----これが理解されない

ルール違反と健康被害の区別ができない

- 表示ミスなどのルール違反によっても、全数回収・全数廃棄
- 「なお、健康上問題がありません」の記述があっても、「お詫びをした」=「非を認めている」=「健康上被害を与えた」という印象
- 「健康上問題がないのに、なぜ回収するのか」=「やなり健康に影響があるに違いない」という推測

検査大好き日本人

- 検査の仕組みは分からないが、「お墨付き」が好き
- 残留農薬ポジティブリストで、「検査しなくていいから、検査済みの証明書ください」
- 全頭検査は、BSE恐怖を抑える特効薬だった



埼玉県のBSEの全頭検査

消費者の誤解を肯定したほうが売れる・・・・食品小売りの現場

- 検査済みが安全
- 不使用表示はよいもの
- 無添加こそが安全
- 国産が安全
- 有機は体によい

誤消費者の誤解

消費者の誤解を前提に メディアも報道

- もちろん、ねつ造やウソはだめだが、記者も理解していない
- 「量の概念」が伝えにくい
- 中途半端な両論併記
- 黒白つけたがるのがメディア・・・「農薬は悪い」「中国産は危ない」
- 後で、「実は安全でした」と訂正したとしても怒られない

議論を否定し、恐怖を煽る

科学は、間違えるもの
企業は営利に走るもの
政府は国民を裏切るもの

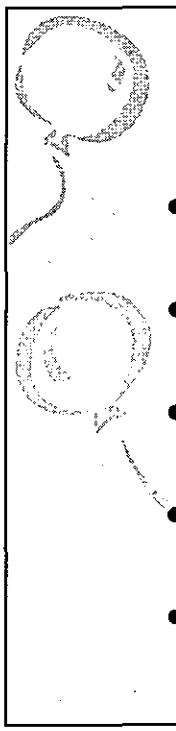
- 最近のテレビ番組で、評論家が「遺伝子組み換えダイズで作った醤油を食べると何か健康被害が出るのですか？」・・・対する食品評論家の答え「BSEだって最初は科学者は大丈夫と言ったのに、人に感染したのだから、科は当てにならない」

ではどうするべきか？
→リスクコミュニケーション

- リスク評価→リスク管理→リスク対策。リスク対策費用は限りがある(国家予算ならば原資は税金)。どのリスク対策を優先すべきか
- 例えば全頭検査などの日本のBSE対策は、1人の日本人がvCJDで亡くなるのを5兆円かけて防いでいる計算(経済学・有路昌彦博士の試算)
- 限られた予算を適切なリスク対策に配分しないと、社会の損失(私たちにとって不利益)

リスコミの効果のほどは？

- 08年7月末日で、BSE対策の牛の全頭検査の検査費用の国庫補助が打ち切り。
- 埼玉県の歳費を使って継続するかどうか、県民にアンケート → 8割が継続求む
- 07年、埼玉県食の安全県民会議では、全頭検査の非科学性などが議論された。これを傍聴した県民にアンケート → 5割が継続求む



まとめ

- 輸入食品は、どちらかと言えば、嫌われ者
- メディアは、輸入食品の安全性確保の実態を認識しているとは言い難い
- 輸入食品の問題が起こると、安全性に原因をもとめがち
- その結果、消費者の不安をあおる報道になる
- メディアも含めて、リスクコミュニケーションに参加し、問題解決に取り組むべき